

ひろしま

歴史回廊

第8部「芸備孝義伝」の世界③

絵は、土橋村(現北広島町)の道益、松益という親子の医師。貧しい村の人々に積極的に医療を施すことに努め、褒賞の対象となった。漢方医らしく、右側には薬種をいれる百味だんす、左側にはそれらをすりつぶす薬研がみえる。

■薬物アータを蓄積

「芸備孝義伝」は、ほかにも医師を何人が取り上げている。貧しい者への無料診療などが「孝義」とされていることが多いが、ここでは別の角度から当時の医師の姿を紹介しよう。

第二編には、有田村(現北広島町)の怡仙と名乗る医師小田汲流がみえるが、彼の父である小田好道も非常に大きな功績を残した。植物の名称や所在、薬としての効能などの情報を、山県郡を中心に集め、「山県草木志」という書

医の群像 深い見識 患者に情愛

物の編述に当たったのである。

その書物は天明元(一七八一)年に藩に献上され、膨大な医学書などを集めた小田文庫とともに現存している。好道は幅広く往診する傍ら、薬物に関するアータを自らの観察によって蓄積し、まとめた。この偉大な作業は、息子汲流の医学の研さんに大きな影響を与えていたに違いない。

■広範な往診エリア

第三編には美奈村(現佐伯区)の左内という医師が取り上げられている。医学の習得の状況を知る上で注目されるのが、京都の官医の家系として知られる丹波家への入門では、著名医の下での修業がひろく行われていた。この入門許可書が残されている。この入門

こうした医師たちのことを調べてみると、その旺盛な探求心、行動力に驚かされる。ご子孫のお宅には膨大な蔵書が残されていることがしばしばで、診療記録をみれば広範な往診エリアもうかがえる。さらに、これらの医師が郡村部に根ざして活動して

土曜日に掲載します



村人たちの診療に当たる医師の親子。ふけ具合から右が道益、中央が松益とみられる＝広島市公文書館蔵

注目に値する。医学に対する深い見識と患者への温かいまなさに支えられた当時の地域医療の姿をかいま見ることができ

(広島市郷土資料館学芸員・大室謙二)